

自然生態調査報告書

昭和46年度

北海道自然保護協会

I 調査の目的

この調査は、北海道の自然保護対策の指針に資するため、道南地域の中でことに近年、環境変貌の著しい苫小牧市、室蘭市および函館市ならびにその周辺地を重点対象とし、自然を保護すべき地域の現状分析を行なったものである。

II 調査地域・項目・方法

II - 1 調査地域

苫小牧市、白老町、登別市、室蘭市、伊達町、洞爺町および函館市とその周辺。

II - 2 調査項目

調査項目としては環境緑地として重要な地区、国土保全上、重要な地区、自然景観の保全上、重要な地区および学術上に重要な地区または物件が挙げられるが、諸種の開発に関連して遺跡などの破壊が生ずる事例の多いことから、本調査では埋蔵文化財の調査をこれに加えた。

なお、調査地域の内、函館地区については地域のはなれていることから報告の上では独立した章であつかった。この地域の調査は、南北海道自然保護協会のスタッフが担当した。なお、苫小牧地区の主として、鳥類相については、苫小牧郷土文化研究会のスタッフが担当した。

Ⅲ 自然を保護すべき地域の現状

Ⅲ-1 地質および地形概況

(1) 室蘭市周辺

室蘭市は古くから工業都市、港湾都市として重要なところであり、人口も増加し、ますます発展増大する傾向にある。この時期において自然保護、公害防止、緑化運動は一層緊急な問題となっている。天然の良港として開けた室蘭港は湾の西、南および南東部を第三紀層と火山岩で構成された標高200m以下の山地、丘陵に囲まれ、古い町らしい複雑な景観と趣きを持っている。古くは山地をくずして住宅地を造成し、碎石のため火山岩の崖をこわしたところもあって、道路、住宅が急崖下にあるところもある。今後新たな住宅造成や碎石などによる岩盤の切りくずしは旧市街の美観を損なうばかりではなく、地盤の安定を破り、豪雨、地震などによって災害を招き易い。また港湾施設、工場敷地のための埋立地が多いことは軟弱地盤をつくり、地震の際に家屋倒壊、道路破損などの災害を招き易い。御前水公園の眺望はすぐれ、市民休養のために必要である。樹木を工場煤煙などの公害から保護することと、緑化推進を行なって旧市街の環境を美しく守り残すことを考えるべきである。

この時に市民の新住宅地として旧市街の対岸、伊達町の境界に近い干舞隨の段丘上に白鳥台ニュータウンの理想郷を計画し、既に一部は開設されていることは喜ぶべきことである。公園、運動場などの厚生施設は必要であり、既に井上公園の購入やゴルフ場設置なども考えられているが、更にニュータウン全体に亘る広い緑化の計画が望ましい。ここは旧市街に対し、広い台地の環境が対照的に健康的である。

室蘭市に近く登別温泉がある。登別温泉は全国的な観光地であるとともに、近接する工業都市室蘭の市民にとって好適な休養地である。温泉は精神的肉体的に有効であるが、登別温泉周辺の自然環境はそのすぐれた景観と自然現象を示し、深い興味を与える。従来温泉の入浴と地獄谷見学のみを観光目的として来訪する人も多いが、大湯沼、日和山を含む一帯を散策することが望ましく、保養観光にもよく、教育的価値も高い。大湯沼、地獄谷は世界的にも貴重な現象であり、登別温泉の熱源は日和山の円頂丘である。

さらに足をのばせば、カルデラ湖の典型的な形態を示すクッタラ湖がある。深い窪みと美しい水の湖は静かな憩いを与え、休養と見学に最もいいところである。登別市はこれらの地域の自然保護を第一に考える必要がある。

目

次

I 調査の目的

II 調査地域・項目・方法

II - 1 調査地域

II - 2 調査項目

(第一部 ; 苫小牧・室蘭地区)

III 自然を保護すべき地域の現状

II - 1 地質および地形概況

(1) 室蘭市周辺

(2) 苫小牧市周辺

II - 2 植生概況

II - 3 鳥類とその保護

(1) 室蘭市およびその周辺

(2) 苫小牧市

IV 自然保護等に対する意見

IV-1 環境緑地について

- (1) 苫小牧について
- (2) 登別市～白老町

IV-2 国土保全について

IV-3 室蘭・苫小牧地区の景観的特色

IV-4 学術的重要性ある自然の保護について

IV-5 埋蔵文化財の保護について

(第二部 : 函館地方)

(第三部 : 苫小牧地方の野鳥目録)

担当 : IV-3 鳥類とその保護(斎藤春雄)

IV-1-1 苫小牧周辺(小林恒明)

IV-1-2 登別市～白老町(明道博)

IV-3 室蘭・苫小牧地区の景観的特色(伊藤秀五郎)

IV-5 埋蔵文化財の保護について(大場利夫)

(第二部) 南北海道自然保護協会

(第三部) 苫小牧郷土文化研究会

(2) 苫小牧市周辺

苫小牧市は最近工業港湾都市として著しく発展し、工場地帯はさらに東方に広く拡大し、人口も著しく増加せんとしている。このような急激な発展は一方公害問題を起こし市民の健康を損なうことも少なくない。都市周辺にできるだけ自然の休養地をつくっていくことが必要になってきている。

北海道大学苫小牧演習林は従来市民の休養に訪れる林として尊重されていた。高速道路が演習林内を通り抜けることには研究実験林として影響を受けること多く、強く反対された。これは当然のことで、演習林外側に余地がないわけでもない。一般市民の憩いの場としても演習林内を美しく保ちたいものである。

苫小牧市街地は平地に比較的整然と拡大されつつあるが、海岸線より約2kmはなれた後背の溶結凝灰岩台地は高度約40m、その末端の崖は海岸線にほぼ平行に走っている。この台地上には緑ヶ丘公園があり、また崖下の歩道は散策に好適である。ただ溶結凝灰岩末端の崖に人工的に手を加えたため不安定になり、地震の折り崩壊した例は多い。できるだけ自然に保ちながら休養地として利用することが必要である。

苫小牧、白老海岸は北方に溶結凝灰岩の台地が広がり、その上に明治43年生成の溶岩円頂丘を戴く樽前火山の静かに噴煙する独特な姿が眺められる美しいところである。海岸平地にも牧場があって、北海道の牧歌的景観の代表的なところとして推賞すべき地帯である。

台地の縁辺近くには浅い小湖が点在して、アイヌコタンの観光地や最近開設された樽前ハイランドがあるが、それらはこの大きい樽前火山の景観を妨げるものではない。

鉄道沿線や国道に沿う景観は最も広く各地の人々に鑑賞される所であり、自然保護の重要なところでもある。登別駅に近く開かれた虎杖浜臨海温泉地区は最近10年の間に急激に発展した温泉地であるが、旅館その他の建物の配置は不規則で美観を欠いている。深度500mの掘泉で摂氏45～54度の温泉が多量に得られることより、多すぎる掘泉、土地や権利の売買も多く、各人各様の計画が現状の如き特徴のない不統一を招いている。交通至便の海岸にこのような著しい湧出量の温泉が新しく出現したことは全国的にも珍しいことで、温泉利用の進んだ計画と温泉地全域の総合的な将来計画が必要である。

苫小牧、室蘭両市の今後の自然保護にはそれぞれの周辺のみならず、広くこの両市を結ぶ海岸の景観への注意も重要である。

Ⅲ - 2 植生概況

苫小牧から室蘭にかけての、いわゆる胆振海岸の植生は、大別して山地、山麓斜面、海岸台地および海岸沿いの低地に区分される。この内、海岸台地と海岸沿いの低地は、竹浦、萩野北東に発達しており、竹浦北西では室蘭に至るまで、海岸低地の巾はせまく、急崖が海に接しているところが少なくない。

苫小牧周辺は、勇払原野に代表される低地植生、砂丘、台地および樽前山地の斜面に区分される。

勇払原野は沼地とその周辺部の湿性草原と若干の火山灰植生が混在する。湿性草原にはウトナイ湖など一部に中間湿原もあるが、大部分はハンノキヨシ群集の優占する低層湿原である。この中に、粗粒火山灰土上に発達するカシワーイソツツジ群集が介在しており、ここではハマナスなどの海浜植生の混生もみられる。

台地は柏原、静川などにその典型例をみられるように主としてミズナラ群集が発達している。これらのミズナラ群集は、この地域の一つの土地的・土壌的極盛相と考えられるが、一方では台地の各所にエゾマツ、トドマツ、アカエゾマツの残存天然性林のあることから考えて、この地域全体に完全に優占するものとは断定できない。

台地末端にみられる沼地の周辺にはしばしばヤチダモ群集がみられる。これらのヤチダモ林は、すでにほとんど使いつくされているが、部分的にはなお比較的良好な林相がみとめられた。

樽前山地とそれにつづく斜面には、エゾマツ、アカエゾマツおよびトドマツから成る針葉樹林と、ややその下方に発達する針広混交林ないし広葉樹林が発達する。ここでは多くの広葉樹種がそれぞれの立地にしたがって成立する。

流域沿いにはハルニレ、ヒロハノキハダ、サワシバ、カツラなどが多く、斜面にはミズナラ、コナラ、カシワ、シラカンバ、ヤマハンノキ、ハリギリ、アズキナシ、コシアブラなどが普通にみられる。

樽前、錦岡、社台地区は、火山灰に被われた台地と、それが開析された沢と、台地末端の多くの沼が特徴的である。台地の上部には各所に深い峡谷が刻まれており、滝も多い。

台地にはミズナラの多い森林が発達しており、林床は主としてミヤコザサに占められる。台地と、海岸低地の接するあたりにはエゾヤマハギ、クロミノウグイスカグラ、ノリウツギ、ハイイヌツゲ、ホザキンモツケなどの灌木類を下生とするミズナラの疎林がみられる。台地の海側斜面はほとんどカシワが優占する。

沢状地には上部ではカツラ、エゾイタヤ、ヤマハンノキなどが多い。下部ではヤチダモ、ハンノキなどが多く現われる。沢の開けたところはハンノキ群集が広く展開する。

台地末端に点在する沼地は、この地域にきわめて特徴的なことは先きに述べた。白老のポロトーをはじめとして社台から錦岡にかけてはことにその数が多い。この沼地はほとんど伏流水を水源としており、澄んで水をたたえ、周囲の森林も比較的よく保全されているため、景観的にも優れたものが多い。

登別山地は、ことに広葉樹の樹種に富むところで、その一部の代表的なところは登別原始林として天然記念物に指定されている。樹種としてはミズナラ、カツラ、ホウノキ、ハリギリ、イタヤカエデ、タラノキ、ナナカマド、オオヤマザクラなどが多い。この他にも比較的暖地性の植物が多く含まれ、寒地性植物と混じて多様な林相を呈する。

クッタラ湖周辺はダケカンバが多い。山地の海側斜面はかなり人為的影響がつよく、自然植生はほとんど残されていない。

室蘭半島は、きわめて樹木の少ないところであるが、半島の東半面にはミズナラおよびカツラの二次林が散在している。海岸斜面の多くは急崖になっており、ここはカツラ林に占められる。樹高は2ないし4mどまりの風衝型のものが多い。林床はミヤコザサに占められる例が多いが、オオイタドリ、エゾヨモギにおきかわっている場合もある。

東室蘭から本輪西、黄金にかけての海岸台地および斜面も、ほぼ一様にカツラ群集に占められており、変化に乏しい。内陸面ではシラカンバ、ミズナラ、シナノキ、イタヤカエデ、センノキ、ホウノキなどを混ざる場合もあり、部分的にトドマツ人工林もある。人工林としてはカラマツがもっとも多い。

黄金から虻田にかけては、所々に比較的大径木の残存するのがみられる。ハルニレ、イタヤカエデ、ミズナラなどで、かつての森林の形相をしのばせるものがある。

Ⅱ - 3 鳥類とその保護

(1) 室蘭市およびその周辺

A 室蘭市の鳥類生息状況

室蘭市はその地形と市街地形成上緑地は少なく、市の南西に位する測量山周辺の林地を見るのみである。なお、中心部を離れ、北東に位する東室蘭以北の本輪西を中心とした8ヶ所の水源地及び浄水池等が持つ水源涵養林が、いずれも狭いながら、鳥類の生息地域といえよう。これらの個所も、いずれも宅地造成等で、せばめられていく状況にあるので、鳥類の生息、渡来地としては、全道各都市中で最も恵まれない状態にあるといえよう。

もともと、沿岸地帯を含むこの地方は、本道を通過する鳥の、渡りの要地として知られており、特に秋季にはツグミ、マヒワ、アトリ、カシラダカなどの大群が滞留していたが、現在ではそのおもかげを見ることさえできない。

室蘭市及びその周辺の鳥について、近年もよく見られるものとしては、シジュウカラ、セグロセキレイ、ウソ、イワツバメ、ミヤマカケス等であるが、他の種類に比べて、目立つのはエゾアカゲラ、ヤマゲラ等のキツキ類である。これらは、個体数が増えたというより、緑地が無くなったので、人目につく場所にも多く現れるようになったのであろう。

B 室蘭市及び周辺の水鳥類の生息状況

この地方には、見るべき河川、沼地がないので、陸ガモ類の生息は望めないが、海岸の岩礁地帯等に各期間海ガモ類を見ることができる。多いのはコオリガモ、クモガモ、ビロウドキンクロ、キンクロハジロ等であるが、シノリガモ、アビ、ウミウも群せいしている。

港内は、かつてはこれらの海鳥を見ることができたが、現在では、埋立、汚染、海藻小魚貝類の絶滅、交通船の輻輳等で、ほとんど姿を消してしまった。

c 保護対策

室蘭市の市街地域は、地形的にみても鳥類の増殖を期待することは無理であろうが、測量山は、その緑を維持することによって、鳥類の生息地として大いに希望の持てる地域である。この地域ばかりでなく、本輪西方面の水源地等も同様に今後の樹木の保存と巣箱、給餌台の架設により、現在以上に鳥類の生息数を増すことができるであろう。また室蘭市は積雪も少なく、鳥類の越冬地としてよい条件を備えているので、その好条件を生かして、冬期間の保護を実施すべきものと思われる。

(2) 苫小牧市

苫小牧市及びその周辺の地域における鳥類の生息状況は、まことに興味深く、専門的な見地からも重要な地域といえる。次にその特種性と生息状況及び保護対策について述べたい。

A 特殊性

1 地理的環境の特異性

北海道内において、太平洋と日本海を結ぶ線を考えれば、勇払原野、ウトナイ湖、長都沼、馬追沼、幌向原野、石狩川下流を結ぶ低地帯であるが、この地域は、太古より北海道を南北に横断する鳥類、殊に水鳥類の渡りの要路となっていたことと推察できる。現在でもガン類の春季の渡りが、この低地帯を通過していることや、従来より大陸系の鳥が、しばしばこの地域で発見されていることでも明らかなことと思われる。

現在では、これらの平野、沼沢地は開拓され、昔日のおもかげはないが、北海道に渡来する鳥類にとって、長い歴史を受けついでいるこの地方は、今後といえども、重要な拠点となることであろう。

2 生息環境の複雑性

鳥類はその習性に適応した環境をえらび、生息、繁殖をするので、その地域環境が多様性であり、複雑な場合は、そこに生息する種類もまた多くなる。この意味で苫小牧地方は理想的な地位にあるといえる。

美々川、勇払川、ウトナイ湖を中心とする水流、沼沢、湿原地帯と、その周辺の平野、灌木林及び背後の森林地帯に加えて、太平洋の海浜を存していることは、海鳥、水鳥、森林の鳥、平野の鳥のいずれも生息し得る環境にあり、一区域において、各種の鳥を観察し得る個所としては、理想的な立場にあるといえる。年間を通じて観察すれば、本道に生息する850種のうち、半数以上をこの限られた地域において見ることができるであろう。

3 都市近郊の生息地としての重要性

苫小牧市は重要な工業都市であり、空港を持つ千代田市近く、更に札幌市、室蘭市の中間に位しているが、このように都市に近く、更に交通に便利な個所に、このような多彩な鳥類の生息する地域は、全国的に見ても類のないことであろう。この地域の有する学術的な価値については、いうまでもないが、野鳥に対する国民の知識と理解を深める場として、今後愈々重要な地位を占める区域であることは多言を要しない。

B 鳥類の生息状況

1 海岸の鳥

海浜に近い水上には、主に冬期間、多くの海鳥が見受けられる。これは北方で繁殖したものが、

越冬のため渡ってきたもので、ウミネコ、オオセグロカモメ、ウミウ、アビ、オオハム、ウミスズメ類の海鳥や、クロガモ、コオリガモ、シノリガモ、ピロウドキンクロ、キンクロハジロ、アイサ類などの水鳥が見られる。また、春秋の渡りの季節には、シギ、チドリの類が海浜に降りていたが、近年は開発のため非常に少なくなった。

ロ 河川、沼沢の鳥

この区域の特色は、水鳥の種類の多いことで、ウトナイ湖を中心とし、美々川、勇払川等の水域に集っている。

繁殖するものとしては、マガモ、カルガモ、カイツブリ、アカエリカイツブリ、クイナ、バン、オオバン等が見られ、春秋には、これらの鳥の他、コガモ、ヨシガモ、オナガガモ、ハンビロガモ、ヒドリガモ其の他の陸ガモ類、キンクロハジロ、スズガモ等の海ガモや、アイサ類などが滞留している。

オオハクチョウは、例年10月下旬から飛来し、4月下旬に北方に退去するが、多い年は300羽以上も見られている。ウトナイ湖は冬期結氷するので、その間は他に去るが、一部は附近の河川の不凍個所に残るものがある。この群の中にはコハクチョウも混っている。

ガン類は春季の渡来時期に、太平洋上より現われ、ウトナイ湖及び附近の水流、湿地に降り、篠津平野の方向に移動して、日本海を渡りシベリアに向かうが、このように都市に近い個所で容易にガンの群を見ることのできる土地は、今ではほとんどなくなってしまった。なお、ここを通過するヒシクイ、マガンの群の中に珍しいハクガンやカリガネが混って見られることがあるのは注目すべきことである。

アオサギは明野地区の湿地帯の、ヤチダモ、ハンノキなどの枝に営巣しているが、その巣の数は昨年の調査では29個であった。

ハ 原野、灌木林の鳥

この地区には平野、灌木林がかなり残されていて、ここで繁殖し、或いは渡りの途中滞留する鳥も多い。繁殖するもので、北海道らしい鳥としては、ノビタキ、オオジシギ、シマアオジ、カッコウ、ハリオアマツバメ、エゾセンニュウなどが見られるが、もちろん、この環境を好む多くの鳥類が生息し、平野、灌木林の鳥は、水鳥と共にこの地域の大きな特色となっている。

ニ 森林の鳥

苫小牧市の西北部を占める森林地帯は、北大演習林、国有林の美林が続き、ここには森林に棲む鳥が生息、繁殖している。特にこれらの森林は、樹種も多く、複雑な林相を呈しているので、これに対応して鳥の種類も同様であり、まことに興味深い地域となっている。

Ｃ 保護対策についての意見

Ⅰ 生息環境の保全

現在鳥類の減少が大きな問題となっているが、その最大の原因は、地域開発に伴う生息環境の破壊にあることが明らかにされている。勇払原野は、道内でも比較的よく自然が保たれていた地域であったが、苫小牧地方の工業化に伴い、その様相を一変しようとしている。もちろん、経済開発の主要性は認められるところであるが、同時に自然の保存について、積極的に取り組むことが必要である。それには、市及び開発関係者はもちろん、全市民の人々が、自然保護に対する認識をもたなければならない。幸い同市には多くの実績を持つ苫小牧郷土文化研究会があり、これを中心として保護の推進に当たっているが、今後の活躍を期待したい。

ロ ウトナイ湖及びその周辺環境保全

ウトナイ湖及び美々川などの河川、湿地帯は、この地区の最も特長のある鳥類の生息地域になっていて、その存在は極めて重要である。したがって、この地域は現在の状態を極力維持できるよう万全の配慮をする必要がある。ことに、ウトナイ湖にそそぐ美々川は、鳥類の生息個所として重要であるばかりでなく、もし水量が減少し、或いは水質が汚濁するようなことがあれば、直ちにウトナイ湖の存在に大きな影響を及ぼすおそれがあるので、特に注意しなければならない。また、ウトナイ湖は、その構成よりみて、容易に周囲の影響を受け易く、この湖の現状を維持するためには、周辺の自然をそのまま保存する必要があることを常に考慮しなければならないか。

ハ オオハクチョウの保護

ウトナイ湖及び周辺の沼沢地帯は、渡りの要地に当たっているので、多くの水鳥が集っているが、その中でも、オオハクチョウは注目をひいている。この鳥の保護については、現地に白鳥保護会が結成され、生息状況を調査すると共に、監視、観察指導、給餌等について努力を重ね、更に苫小牧市及び周辺の生息個所に対し、猟友会支部の協力を得て監視機関を設置している等、万全と思われる措置を講じているのは、まことに結構なことである。

オオハクチョウの保護について、今後考えるべきことは、この地区のように、自然の餌のある場所においては、できるだけ環境を保持して、これを採餌できるよう配慮することが、まず必要である。次に、鳥をおびやかさぬよう、観察或いは写真撮影等に際して、十分注意をすることが肝要である。今後、いよいよ来訪者も増えることと思うが、現場の管理はこの上とも周到に行なわなければならない。

更に給餌については、オオハクチョウの餌の不足をおぎない、これにより安心感をあたえて、鳥と人間との間を親しくする意味で、今後とも必要と思われるが、飼鳥のように、その餌のみで生活

させるような状態にすることは、むしろ野生の鳥に対し悪い影響をあたえる結果となろう。現実の問題として、いかなる給餌の方法をとるべきかということは、その個所と生息状況とにより非常な違いがあるが、基本的な考え方として、このことは考えておく必要がある。

オオハクチョウは、その地方の名物として、観光資源的な立場にも置かれているが、野鳥に親しみ、理解を深めていく上から、それも結構なことといえよう。しかし、あくまで保護の本質を忘れぬことが大切である。このことについては、苫小牧文化協会その他の関係者が適正な判断をもって対処していることを確認することができた。

ニ アオサギの保護

苫小牧市明野地区の湿地帯に、アオサギの集団繁殖地がある。この鳥の繁殖地は、本州では少なくなってきたが、北海道も、よく知られているのは5ヶ所で、決して多いとはいえ、この繁殖地は貴重な存在と云える。苫小牧文化研究会では、毎年その生息状況を調べているが、その結果として、集団繁殖地の巣の数は、昭和38年の98個に比し、昭和46年は29個に減っていることが分った。この8年間に、営巣地の環境が著しく変わったとは思えぬので、減少の原因を推察することは難しいが、とにかく、この状態では消滅するおそれも多分にあるものと考えられる。

もともと、サギ類の集団繁殖地は、比較的人間と接近した個所につくられていることが多いが、そこが安全であり、採餌個所があれば移動はしないものである。この明野地区の巣は、容易に近づく難しい湿地のヤチダモ、ハンノキなどの枝につくられている。この周囲は開放され、南方は苫小牧市街に面し、東方1キロの個所を国道が通っているが、この程度の状況では、巣を放棄する原因にはならない。渡来数の減少する原因は、いろいろあり、例えば採餌個所の減少、カラスによる卵等の被害、人間が近づくことによる被害等であるが、ことに営巣数の少ない場合は、その影響を受けやすい。したがって、この集団繁殖地の保存については、今後更に考究すべき点が多いと思われるが、現在最も必要とすることは、できるだけ現地をそのままに保存しておくことで、この基本的条件が備わらなければ、いかなる方法をとっても営巣地は消滅することであろう。

IV 自然保護等に対する意見

IV - 1 環境緑地について

(1) 苫小牧周辺

苫小牧周辺については、この地域の植物群落が、いわゆる胆振海岸地帯の諸種のタイプを含み、かつ、代表的なものと考えられるので、その環境の分析を試みた。

A 本地域における環境区分

本道における自然は大略次の6区に分類し取扱うことが出来よう。

- 1) 湿性草原
- 2) 沼沢林
- 3) 二次性林
- 4) 落葉天然林
- 5) 針広混交林
- 6) 農耕地

本調査においても上記区分を踏襲したが、地域の実状を考え一部手直しをしてある。以下に本調査で使用した区分及びその概要について述べる。

第1区分…(湿性草原)…本地域内には、いわゆるミズゴケ群集で代表されるような地域は池塘の周辺を除き存在しない。生物環境としての評価は両棲類、水棲昆虫の生活環境としての価値及び第2区分以下の生物環境の成立要因としての価値がこの地域では重要となろう。

第2区分…(沼沢湿性性)…この区分は前記湿性草原から適湿林への移行層や中間型のすべてを含むものであるが、包含される生物種の類似から河畔林のようないわゆる回廊状灌木林も含めた。本地域内では湿原内のヤチハン、ヤチダモ林及び樽前吐出堆積丘陵群の周縁に存在する沢地、池塘を取り囲んで分布している。

第3区分…(落葉広葉樹萌芽林A)…本区分は冒頭に掲出した6区分中の二次性林に相当するものであるが、本地域内には本州の薪炭林状態にある新しい萌芽林と二段林状態にあるが大径樹をほとんど含まない林分とがある。それぞれ構成生物種に差が認められるのでこれを分け樹高8m以下の若木が主体となった林を本区分に入れた。

第4区分…(落葉広葉樹萌芽林B)…前者の進んだもので樹高8m以上の高木層を持ち更に稚樹

又は灌木の低木層を持つもの。

第5区分…(落葉天然林)…冷温帯に発達する広葉樹林で、稚樹、成木、過熟樹、枯死木の各段階を含んだ区分で、本地域内に実在するかどうか分らないが、第4区分の更に進んだ状態乃至は当地域における広葉樹の仮想的極相として考える。生物環境構造に関する資料は道内他地域から流用した。

第6区分…(針広混交林)…本区分も当地域に自然状態で存在すると考えるのは困難であるが、針葉樹の人工的混交植林等の管理技術を含めて考えることにし、その環境価を比較する為に掲出した。

第7区分…(農耕地)…通常の農耕地は一年生草本の単純群集で休耕期には裸地化する植分と考えられるが、本調査では多年性草本からなり単純群集ではあるが、裸地期をもたない牧野、採草地もこれに含めた。特に本区分の特徴としてあげられるのは人間生活からの影響と周辺林からの影響が集積されて現われることで、生活環の全部をこの区分内で過すようなものが少なくなっている。又、人間生活との関連で多食型(いろいろな食物を摂取する)、汎環境区分型の動物が多く出現する区分でもある。

B 環境区分の構造価と動物相

動物種を主体として考えた時、植物群集は環境として考えることが出来る。従って植物群集の構造は動物種から見た環境構造として理解することも出来る。群集構造の解析法は目的により違い又可成煩雑であり、精度の高い結果を得るには高い技術的水準を要することが多い。本調査では実用性を重視し、しかも群集構造の基本的性質が充分反映される方法として森林の階層構造に重きを置き、構成種数をもって表現する構造指数(E・I)法を考案した。詳細については省略するが、一応構造の複雑度を数量化したもので、数値が増加すると構造度が複雑になるものである。

表1は前節の環境区分を構造指数で表わしそれぞれの区分と結びつく動物種数(脊椎動物のみ)を一覧表にしたものである。

此の表には生息密度に関する要因が入っていないので、所謂環境の生産性についての直接的情報は提供してくれないので、この点に関しては別の項で改めて問題とすることにした。

本表から明らかであるが、環境構造が複雑化するに従い、これと結びつく動物相も複雑になる。このことは植物的要素をもって環境の価値を評価することへの妥当性を示している訳であるが、ここで重要なのは構造の複雑化は即ち環境全体の安定度の増加と直接結びつくというElton以来よく知られた生態学上の経験則があり、人間環境として如何なる構造を持った自然が望ましいかという本調査の最終目標決定の為にこの構造指数は十分役立つものと考えている。

区分と結びつく動物相の内容について概説したい。北海道における両生類、爬虫類は種類、数ともに少なく北海道動物相の主要構成員ではなく、むしろ特異な種が分布し生物地理学上問題となるにすぎない。本地域には特異種の分布は確認されず、従って区分間に判然とした出現傾向の差が認められない本地域では特に重要視することはないであろう。

一方哺乳類、鳥類で区分間で出現傾向に明瞭な差があり、これら動物群の生活要求の多様性をよく反映していると云える。そこでこれら動物群について環境区分と種構成の関連を略記して見ることとする。

哺乳類

第1区分（構造指数 E . I 7~13）非常に単純な構造の環境で生産力も低い。定住的哺乳類はなく、草食性の小型哺乳類（一部のネズミ類）が季節的に或いは個体群増大時に移住利用するに過ぎない。更にこれら草食小型獣に依存する肉食動物が部分的に侵入利用するにすぎない。動物群集生産力の最も低い場所である。

第2区分（E . I 40）多様性に富んだ環境であり、構造度も落葉天然林にほぼ匹敵する。しかし此の区分の特徴として、林床の湿気度が高い為、林床草本の多くは水性のものであるか、又は量的に非常に少ない。この点が一次消費者（草食獣）の貧弱であることによく現われている。二次消費者（食肉獣）は多様化し、特殊なものを除きほとんどが出現する。

第3区分（E . I 23~31）階層構造が発達せず、構成樹も若いため種子の生産が非常に少ない。生息する哺乳類は灌木林のそれによく似ている。大規模のものが存在しないのでこの区分特有の動物構成というよりも周辺区分よりの侵入要素が大である。環境としても安定度は低く漸次段階（区分4）へ移行するものである。

本区分の代表的哺乳類としてエゾヤチネズミを上げてよいであろう。

第4区分（E . I 30~38）前者に階層構造が附加されたもので安定度もやや増加している。定住的動物種は前者と余り変らないが、非定住種の中、植物依存度の高い一次消費者、混食者（中でも種子食のもの）が増加し、食物環が複雑化している。従って特定種の大発生による環境の内部破壊の危険は非常に少なくなっている。代表的哺乳類はノウサギ、シマリス等をあげられよう。

第5区分（E . I 35~44）前者に大径木、過熟木、枯損木の加わったもので本地域において極相林として成立し得るかどうかが判然としない点もある。従ってここでは特に安定相として考えないことにしたい。本区分では十分の種子の供給、萌芽稚樹の供給が保証される。更に、過熟木により樹洞が供給され、哺乳動物には絶好の生息地になる。大型獣の生息も保証される。代表種はシカ等の大型獣としてよからう。

第6区分 (E, I 51~62) 北海道においては最も動物相の豊富な環境で構成種のほとんどが定住種であり、安定度は最も高い。森林の生産力も第5区分に比すると大きく、特に一次消費者にとっては年間を通じて安定した食物の供給が保証される区分である。

代表種として、エゾリス、クロテンを大型獣の他に附加してよいであろう。

第7区分 区分自体の安定度については問題があろうが、絶えず人工的に管理される区分であるのでその点では問題とならない。人間生活と結びついた動物種が現われるのが1つの特徴であろう。キツネ、ドブネズミ等を代表種としたい。

鳥類

第1及び第7区分は草索性鳥類が主体となるが、後者では人家営巣性のものが加わり複雑化する。それぞれの代表種を次い上げる。

第1区分 シマアオジ、ノビタキ

第2区分 コヨシキリ、ミソサザイ

第3区分 アオジ、ウグイス

第4区分 カラ類、シメ

第5区分 ムクドリ(林縁部)、キビタキ、ゴジュウカラ

第6区分 クマゲラ、キクイタダキ

第7区分 スズメ、ハシブトガラス

C 環境利用に関連して

本地域の大部分はI, III, IV(それぞれ区分を示す)に属し一部にIIが存在していると云えよう。これらの中で最も安定度が高く、かつ生物生産も高いのはIIの沼沢林である。しかしII, IIIの二次林は遷移途上のものであり環境として考える場合、当然V, VIの天然林への移行を前提として考えるなければならない。

一方本調査の希求しているであろう環境の性格を、①安定度の高いもの、②生産力の高いもの、③保健林的要素のあるものと規定すると、次のようにならう。

① 安定度の高いものとして、沼沢林、広葉天然林、針広混交林

② 生産力の高いものとして、二次林A、針広混交林

③ 保健林としては要求される条件がはっきりしないので構造を規定するのは困難であるが、恐らく湿性草原以外ならほとんどの区分がその要求を満たせるのであろうが、動物種の多少からして、ここでは一応沼沢林、広葉天然林、針広混交林を上げたい。

上記3条件を十分満たしてくれる区分は針広混交林の構造をもったものになるが、現在本地域内

には残念ながら存在しない。しかしながら安定度、生産力を背景として環境問題を考えるならそれぞれの環境区分の安定度に応じて群集の平衡を破らない程度に人工を加え構造を改革して行くことは可能であろう。この場合広葉樹にあっては早期結実が望まれる樹種（例えば洋種ナナカマド）、針葉樹にあっては発育早く結実も比較的早いもの（トウヒの如き）或いは早期に枝を広げかくれ場所を提供するもの（ストロブマツ）等を取り入れ人工巣箱の利用等を組合せて管理を強く行なうのも一つの方法であろう。

なお、当地域における沼沢林は構造の安定とも関連し有用な区分であるばかりでなく、広葉樹二次林の保護的役割もあり、保存林分に附属した形で残すのが有用であろう。

保残緑地の面積に関しては改めて検討したいが非常に粗い表現をするならウサギ、キツネが住みつける環境としては50～100ha規模のものが必要になって来る。これは分割の場合の最低面積であり、こうしたいわば団地状の緑地を後背地の樽前丘陵林に回廊状の林で連結するか、又は防風保安林と組合せた有効な配置を考えることによりその環境としての効果を数倍に高め得るものとする。

表 1 植物的環境区分と各区分に包含される動物（脊椎）群集の構成

| 植物的環境区分 E. I | | I | II | III | IV | V | VI | VII | 注 |
|-----------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------------|--------------------|
| | | 7~13 | 40 | 23~31 | 30~38 | 35~44 | 51~62 | | |
| 両生類 | 定 3非定 | 定 2非定 | I 湿性草原 |
| | 一次 | 一次 | 2 1 | 2 1 | 3 | 3 | 2 | II 沼沢（下層）湿原 | |
| | 二次 | 3 | 8 | | | | | | III 落葉広葉二次林 A（若令林） |
| 爬虫類 | 一・二次 | | | | | | | | IV 落葉広葉二次林 B（成林） |
| | 一次 | 0 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | V 落葉広葉天然林 |
| | 二次 | | | | | | | | VI 針広混交林 |
| 哺乳類 | 一・二次 | | | | | | | | VII 農耕地 |
| | 一次 | 4 | 1 5 | 1 7 | 1 9 | 2 0 | 2 2 | 1 1 | E. I 構造指数 |
| | 二次 | 2 | 2 4 2 | 4 4 | 4 6 2 | 6 7 1 | 7 7 | 4 | 定…………定住的動物種 |
| 鳥類 | 一・二次 | 2 | 5 | 6 | 6 | 6 | 6 | 2 | 非定…………非定住的動物種 |
| | 一次 | 1 9 | 4 2 | 4 3 | 3 4 | 3 4 | 8 1 | 4 1 | …………小計の種類に水禽を加えた種類 |
| | 二次 | 6 3 | 7 5 | 3 | 3 3 | 5 1 | 7 6 | 5 | |
| 小計 | 一次 | 7 | 18 14 | 8 5 | 11 14 | 19 9 | 27 10 | 6 | |
| | 一・二次 | 2 1 | 18 3 | 2 4 | 9 8 | 15 4 | 21 4 | 12 | |
| 合計 | | 18 8 | 60 26 | 24 16 | 40 33 | 59 20 | 81 22 | 38 1 | |
| 合計 | | 2 6 | 8 6 | 4 8 | 8 1 | 8 7 | 10 3 | 3 9 | |

(2) 登別市～白老町

(1) 海岸段丘斜面の植生保全

室蘭から登別市域へ入ると鶯別、富岸、川上、幌別町などの市街が続くが、この辺は海岸に沿う奥行き約1～1.5kmの細長い平地に鉄道、国道が通り、これに沿うて急速な市街化が進行している。

この海岸平地の背後には高さ50～100mの段丘が迫っていて、これが斜面をもって平地に臨んでいる。海岸平地には、すでに自然植生はほとんどなくなっているが、段丘斜面には雑木林とこれに混って古く植林されたスギ、トドマツなどの常緑樹林が比較的良好に残されている。

現在、室蘭市寄りの鶯別町辺りでは市街化が連年の進行し、これが段丘斜面にまで及び、ここを削りとして宅造されているところも散見される。

この段丘斜面植生は、風景的にはもちろん海岸気象環境保全や土地侵蝕防止の上からも貴重なものであるから、市街化はこの斜面植生を保存しながら、これを避けて行なうべきである。このことは、現在はまだ市街化が進んでいない幌別町に至る段丘斜面、さらに市街化が急速に進行している白老町虎杖浜附近についても同じであって、斜面植生を先見的に保全する策を講ずるべきである。

(2) 海岸平地林の保全

虎杖浜から白老本町へ至る海岸平地は奥行き1～2kmであるが、虎杖浜辺りではすでにここが温泉地として市街化が可成り進行して、この辺りの平地林はほとんどなくなってしまったが、これより白老本町寄りの平地にはまだ大小のカシワ林の群落がある。将来はここにも市街化が進むものと予想される。このような樹林群落は、とくに新たな海岸植林によっては容易に得難いものであるから、数ヘクタールずつの樹林緑地として保存し、連年の市街化を防止する必要がある。

(3) 湖沼周辺植生の保全

(イ) 室蘭工業用水池周辺、幌別川の河口より約3km上流にダム湛水による人工湖があり、水面約100haに達する。周囲が樹林地で風光明媚、ために夏冬を通じて、観光、レクリエーションの利用が増加している。この周辺樹林地は民有林ということなので、無計画な観光開発が行なわれることのないよう、先見的な自然保全計画により指導されることが必要と思われる。

(ロ) 橋湖周辺の自然保全、水面約7haの沼であるが、周辺は立派な自然林の斜面で囲まれている。現在、林道が湖周辺に通じていて、カルルス温泉側からの歩行散策利用が見られる。国立公園内に位置することもあって比較的良好に保存されているが、美笛～室蘭を結ぶ道々がこの湖の至近地域を通して計画されていると聞くので、これが実現すると、急速な利用者増、利用態様の変化が予想されるので、湖とその周辺植生を含め、万全の保全策が先行的に樹立されなければならない。

(ハ) ポロト沼周辺地保全、白老本町の北側に接して、水面約30haのポロト沼がある。沼

の周囲は人工林、自然林を含めた国有林となっており、加えて鳥獣保護区でもあるので、現在は比較的よく保全され、沼を周る林道によって歩行散策利用が行なわれている。この地域では、今後観光、レクリエーション利用者の急激な増加が見込まれるので、この貴重な自然資源が損壊されることなく、後世に亘ってよく保存されるよう、一層の整備ならびに保全対策が必要である。

IV - 2 国土保全について

本地域の植生の、国土保全上の効果としては、砂丘および砂原の被覆、海岸台地斜面の被覆が挙げられる。第 8 に、森林の河川の流量調整機能がある。

砂浜および砂原植生は、本地域では発達が著しくないわけではなく、すでにその大半は破壊されてしまっている。いわゆる砂丘林は全くみることができない。

苫小牧東部開発地域のように、後背地が広く開けているところでは、砂丘林の有無が大きく後背部の植生に影響する。したがって、現存する砂丘植生の維持と、造成が必要である。

苫小牧から虎杖浜にかけての海岸線では、やや山寄りに若干の海岸林がせまい帯状に連なっているところがある。これらは台地植生に対して風衝をやわらげる効果をもたしているものと考えられ、結果的には段丘斜面の保全に役立っているものとみられる。

海岸台地（段丘）の斜面は、一般にカツワ林に占められており、地形的極成相と考えられるところから、この安定した林相を保つことが段丘の保全にもっとも必要である。このことは室蘭半島の東面でもっともよい例がみられる。

河川沿いおよび河川上流部の森林が十分に保全されれば下流流域の保全に有効であることはいうまでもない。ここに火山灰性土壌に被われるところの多いこの地域では、河川の流域でしばしば侵蝕がみられるのであって、上流ならびに流域森林の不用意な伐採、植生の破壊に注意すべきことを示唆している。樽前、鋪岡などで宅地、別荘地分譲などのための造成が行なわれているところではことに注意が肝要である。

また、先きに述べたように、火山灰層を透過して段丘の末端部で池をつくっている例が多く、これらの美しい湖沼群の保全のためにも上流部森林の保全が重要な問題となる。

Ⅳ - 3 室蘭・苫小牧地区の景観的特色

現在の北海道では、森林の保存と造成は、国土保全の意味からも、産業上の見地からも、また景観学的立場からも、もっとも緊要な課題の一つとなっている。長年にわたる乱伐と15号台風による未曾有の大規模な風倒の結果、全道的に林相がきわめて稀薄になっているからである。50年前に石狩川上流や音更川上流にみられたような鬱蒼とした樹海の展開はすでに失われたが、しかし大雪山系、日高山脈、道東の一部には、なお見事な森林帯がいくつか残されている。それに比べると、室蘭、苫小牧を含む胆振管内の森林資源は全体的にきわめて貧弱である。したがって、北大の苫小牧演習林や、洞爺湖畔にわずかに残された樹林等はきわめて貴重な価値があり、その保全対策に十分な配慮が必要である。

現在は森林に乏しい胆振の平坦部も、かつては鬱蒼とした森林に被われていたのであろう。そのことは、明治3年4月にはじめて亙理藩の350名の開拓移民第一陣が入植してから100年を経過したこんにちの伊達町に、いまなお現在する樹齢100年をこえる老木によってうかがうことができる。徳川時代に開拓された松前地方を除けば、亙理藩主伊達邦成によって開拓の進められた有珠郡は、明治以後北海道でもっとも早く計画的入植の行なわれたところであるが、現在100年の樹齢をもつ大木のいくつか、開村百年記念の指定木として伊達町に保存されている。その中のニレ(推定樹齢100年、字舟岡)とカシワ(樹齢約100年、稀府小学校校庭)は、この土地に自生した原生木であり、開拓当初はまだ若木であったはずである。そのほかサイカチ(3本)、イチョウ、モミ、ヒノキ、スギ、ケヤキの7本のいずれも樹齢100年の老木が残っているが、これらは亙理その他の地から移植されたものである。たまたまこんにちまで命脈を保ったこれらの自生木から、当時この辺一帯もニレやカシワの生い繁った森林があったことが想像されるし、おそらく山地には針葉樹が多かったであろう。また他から移植された樹木の成長振りをみても、この一円に森林の造成が可能であったことを示している。

林相も景観のもっとも重要な要素の一つであるが、胆振地方の景観を特色づける大きな要素は、むしろ地形と気象であろう。

虻田から伊達にいたる内浦湾沿いの地区のように本道でもっとも気候の穏和な地域がある。例えば室蘭の1月中旬の平均気温は-2.0℃で、江差の-1.2℃に比べればやや低いが、函館の-3.0℃よりは1度ほど高い。8月中旬は、室蘭は22.8℃で江差の23.9℃よりはやや低く、函館の22.8℃とほぼ同じである。

北限の山岳地帯を除けば、南に開けた海岸地方は冬期の積雪量も多くはない。風景にも大雪山系

を中心とする中央山岳地帯や道東の大平原のような轟壮、雄大な趣きはなく、それと対照的である。ドーム型の樽前岳、シェードペロニーテ型の有珠岳と昭和新山は、それぞれ特異な山容にもかかわらず、それらを背景とする胆振の平原景観はむしろ女性的である。室蘭市を取囲む地球岬の海蝕断崖を除けば、内浦湾の海岸線の大方はなだらかな砂浜の湾曲であり、地球岬を境に東に延びる太平洋の沿岸も、断崖の少ない平坦で単調な海岸線が、日高の鶴川あたりまで続く。

海岸風景の単調な理由の一つに海鳥の減少があげられる。かつては内浦湾から日高海岸にかけて、春から秋までカモが群をなして生息していたが、近年はその数がいちじるしく減少した。その餌となる沿岸の魚族が姿を消したからである。かつての村々の漁船の賑いもすでに見られなくなってから年久しい。この単調な海岸線の後背地は、おおむね平坦な草原か湿原である。平野の北を限る鷺別岳(911m)から、オロフレ岳(1,281m)、ホロホロ山(1,312m)にいたる山嶺も、1,000メートル前後の低山で、おだやかな山容の山々である。日高や十勝などに比べて、地形が見た眼に単調なのは、長い河川は長流川だけで、他はすべて短い川であることも一因であろう。

この太平洋沿岸は冬期も積雪の少ない地域である。最深積雪量の記録をみても、函館74cm、札幌169cmに対して、室蘭は59cmである。後志山塊地帯のごときは、例年250cmから300cm円外の積雪量であるが、この地域は年によって10cmに達しないこともある寡雪地帯である。気候的にも道南と道東の接点に当るが、ゆるやかな起伏を描く山なみから海岸線にいたる緩傾斜の風景には苛烈な趣きはない。山地にも平坦部にもすでに鬱蒼とした原生林はなく、海辺に沿って自生する低い広葉樹、カシワ、ミズナラ、ハンノキなどの疎林が特徴的である。

この辺り風帯の地層には古往におきた何回かの恵庭岳・有珠山・樽前山の噴火による火山灰の重層がみられる。とくに樽前山は何回となく大爆発し、その火山灰の堆積は速く日高・十勝一円に及んでいる。記録に残っている新しいものでも1667年と1804年以降18回を数え、とくに1874年(明治7年)と1909年(明治42年)、1923年(大正12年)の爆発は顕著であった。

海岸線に沿って日高地方まで大木が育たないのは、主として濃霧のためと考えられている。そのことがこの辺り一帯の風景を特徴づけている。北海道の太平洋岸には春から夏にかけて、太平洋沖に発生した濃霧が襲来する。とくにエリモ岬から根室方面にいたる道東の沿岸に多い。濃霧は10ないし40ミクロンの微小水滴の集団で、霧の中の温度は地上近くがもっとも低温であり、霧日数はエリモ岬や道東では夏期のあいだ90日におよぶ。この海霧の侵入によって気温の上昇が妨げられ、植物の成育ははなはだしく影響される。

この海霧はその発生区域と風向きとの関係で、主としてエリモ岬から東の釧路・根室にかけてい

じるしいが、その影響は、程度の差はエリモ岬の西方の日高海岸から内浦湾口の白老あたりまで及ぶので、日高から室蘭にいたる太平洋沿岸一帯に共通の植物相と相似的な景観を作り出すのに役立っている。日高海岸の海蝕段丘にみられる矮性の幹の傾斜したカシワ、ミズナラ、シナ、ハンノキなどの疎林や、海岸に沿って東西に延びる草地や砂浜の植物群落に共通の様相が見られるのはそのためである。海霧の影響は白老附近までの沿岸風景を特徴づけている。

胆振海岸の植物群落を形成する主な種類は、砂丘にはハマナス、ハマエンドウ、ハマボウフウ、ハマニンニク、ハマニガナなど、それに続く草原にはハマナス、エゾニウ、オオマツヨイグサ、キリンソウ、ススキ、センダイハギ、ツルウメモドキなどが見られる。これらは特別に珍しいものではなく、普通にひろく分布しているものであるから、網走地方やサロマ湖地方のようないわゆる原生花園と呼ぶような華麗な景観ではないが、その草原にはやはり寒冷な北海の独特の雰囲気がある。

胆振の平坦部でもっとも特異な美しい景観は、ウトナイ湖を含む美々川流域とその西方にひろがる勇払原野の湿原であろう。管内には支笏洞爺国立公園があるが、管内の東部から日高エリモ岬にいたるあいだの平坦部には、とりたてて喧伝するほどの景勝地はない。美々川流域は唯一の景勝地というべきである。大きな川ではなく周囲も壮大な風景とはいえないが、その景観は捨てがたい風趣に富んでいる。とくに春と秋の水辺の景色は美しい。東苫小牧工業団地に近いから、なおさらその保全に賢明な方策を講ずべきである。

Ⅳ - 4 学術的重要性ある自然の保護について

本地域で学術的重要性ある自然としては次のごときものが挙げられる。

(1) 勇払原野のハナゴケ、ミヤマハナゴケ群落

この群落はウトナイ湖周辺ならびに安平川流域の数ヶ所にみられるもので、多くはカシワもしくはコナラ林の下生として生ずる。ミヤマハナゴケは低地に大きな群生をみることが珍らしく、気象的、土壌的要因によって成立したものと考えられる。この群落は副次的には環境汚染の指標として有効であり、適切な保存と利用を考えるべきであろう。

(2) ウトナイ湖および周辺の湖沼

ウトナイ湖および周辺の湖沼は、白鳥をはじめ水鳥の生息地・飛来地として、また水生動物・淡水魚族の生息地として重要である。また、周辺の湿原植生は、勇払原野の一つの特長をなすものであって、景観的にも重要な要因となっている。

(3) 美々川流域湿原

美々川はウトナイ湖に注ぐ典型的な泥炭地河川で、周辺はヨシ湿原が発達し、特徴的な景観をつくっている。低層湿原が開発によって失なわれつつある現在、都市附近に所在する泥炭地および泥炭地河川として重要なものである。

(4) 平木沼沼群

苫小牧東部、静川丘陵の東側にある平木沼、朝日沼など数個の池沼は、生物的に比較的攪乱を免れており、諸種の淡水藻類にめぐまれるなど学術的に興味あるところである。

(5) 社台海岸草原

草原としては大きいものではないが、エゾキスゲ、エゾカンソウ、ヒオウギアヤメ、センダイハギ、ハマナスなど多くの海岸草種をみることができる。エゾキスゲは比較的稀れな植物であり、その所生地としても重要であろう。

(6) 樽前湖沼群

社台、樽前、白老地区には、前述の平木沼沼群と同じように、海岸段丘の縁辺に小さな、しかし美しい池沼が散在する。これらの池沼は火山灰層にぬける伏流水によって成立しており、透明な水をたたえ、周囲の森林も比較的によく保全されている。中にはアキアジ沼などのように、鮭の産卵がみとめられるものなどもある。池沼周辺の湿原にも興味あるものが多い。

(7) 徳舜別高地

徳舜別高地は徳舜別岳(1,309m)、ホロホロ山(1,822m)、オロフレ山(1,230m)、来馬山(1,040m)などから成り、高度は比較的低く、地形も単調であるが、植物地理学上からは注目すべき植物の所生地として知られる。すなわち、ウスバスマシ、ヒダカオトギリ、エゾツツジ、チシマギキョウ、チシマツガザクラ、ミヤマオグルマ、オノエスゲなどであって、たとえばミヤマオグルマは西限の産地とされている。

樹木限界は1,000m位で、その上部はハイマツ帯となり、所々にお花畑が点在する。

(8) 鷲別岳

鷲別岳は室蘭半島の北約12kmにある標高911mの低山であるが、山頂の北面に崩壊地があり、ここにウスユキソウ、コケモモ、ミヤマダイコンソウ、イワキンバイ、ハクセンナズナ、ハクサンチドリなどの高山植物を生ずる。ことにウスユキソウは北海道における唯一の産地となっており、この他に、コエゾサクラソウ、ワシベツミヤマコウボウ、アポイタヌキランなどを産し、植物地理学上、重要なところである。

(9) 鷺別湿原

室蘭半島の基部に当る東室蘭から鷺別にかけての小湿原があり、比較的变化に富む植生が存在する。ことにカツリグサ科、とくにスゲ類を主とする単子葉植物相に富んでいる。近年の都市開発とともに著しく狭められており、その保全が要望される場所である。

Ⅶ - 5 埋蔵文化財の保護について

<苫小牧地域における遺跡分布の現況>

① 苫小牧市

苫小牧市は太平洋に南面して立地し、その背後は海岸線に沿って低位段丘が連っており、段丘を縫って苫小牧川、勇払川、安平川と多くの河川が流れている。それらの河川の支流とそのだ行によって生じたと思われる大小の湖沼がいたるところに散在している。こうした地理的環境は、漁撈並びに狩猟に依存して生計を立てた先住民族にとっては、極めて生活条件に適した土地であったことはいうまでもない。従って本地域には先住民族の残した生活の跡である遺跡がかなり多く残っている。

苫小牧市内に存在している先住民族の遺跡の概略については、昭和29年苫小牧市教育委員会発行の「苫小牧地方古代史」(註1)がある。これによれば、その当時確認された遺跡は植苗の各地での約10ヶ所があげられている。年代的には縄文文化、続縄文文化、擦文文化、アイヌ文化の、各時代に亘っていることが確認されている。

その後昭和35年度から苫小牧市の主催による遺跡の調査が積極的に行なわれるようになり、同年には河野広道・藤本英夫氏らによって、植苗植村遺跡の調査が行なわれた。そしてここは縄文文化後期と、続縄文文化期の祭場遺跡であることが確められた。同36年には藤本英夫氏によって静川遺跡の調査が行われ、縄文文化早期の竪穴住居址と祭場遺跡であることが認められた。

また同38年には大場利夫と扇谷昌康氏によって、植苗タブコブ遺跡の調査が行なわれたがここは縄文文化中期の墳墓と、アイヌ文化期の墳墓遺跡であることが確められた(註2)。同39年には大場、扇谷氏は再び植苗タブコブ遺跡と高岡遺跡の調査を行ない続縄文文化期と擦文文化期の竪穴住居址が確められた(註3)。同40年には大場及び扇谷氏が、三度植苗タブコブ遺跡の調査を行ない縄文文化中期の墳墓遺跡を確認した(註4)。同41年には大場と佐藤一夫氏が、高岡緑ヶ丘遺跡の調査を行ない続縄文文化期の墳墓遺跡であることを確めた(註5)。なお同年勇払河畔で丸木舟を発掘したが、年代は寛文7年と推定された。従って今から約300年前のアイヌ文化期の

ものである。なお丸木舟は国の重要文化財に指定された。

同 4 2 年には佐藤一夫氏によって大島遺跡の調査が行われたが、ここでは縄文文化早期から続縄文文化期に亘る各年代の遺物と、縄文文化後期の墳墓が発見された(註 6)。同 4 3 年には佐藤氏によって高岡遺跡が調査され、縄文文化前期以降続縄文、擦文文化に亘る年代の遺物が発掘された(註 7)。同 4 4 年には佐藤氏によって、美沢植村遺跡の調査が行われ、縄文文化前期以降続縄文、擦文文化に亘る年代の遺物が発見された(註 8)。同 4 5 年には佐藤氏によって、静川柳館遺跡の調査が行われたが、縄文文化前期以降同晩期までの年代の遺物が発掘された(註 9)。同 4 6 年には佐藤氏によって、糸井遺跡第二地点の調査が行われたが、ここは縄文文化と続縄文文化の遺跡である(註 10)。

以上に列記したものが、今日まで苫小牧市内で行なわれた遺跡調査の大観であるが、これら一連の調査によって明らかになったことは、苫小牧市内には、縄文文化早期、前期、中期、後期、晩期の縄文文化の全期間、続縄文文化期、擦文文化期、アイヌ文化期の各年代に亘る、墳墓並びに祭場遺跡と、これに伴う竪穴住居址が、群在していることである。殊に墳墓、祭場といった宗教に関連した遺跡が多いことが、本市の遺跡の特色といえる。

また本市の遺跡に関して、上述の文献の他にも報告書があるので、ここにまとめて紹介しておく(註 11)。なお前記した遺跡の調査は、苫小牧市教育委員会の主催によって行なわれたもので、発掘調査によってえた資料は、すべて苫小牧市立青少年センターの資料室に保管されている。

(註 1) 河野広道 苫小牧地方古代史 昭和 29 年 3 月。

(註 2) 苫小牧市教育委員会 苫小牧市植苗タブコブ遺跡調査報告 昭和 38 年 10 月。同
苫小牧市植苗タブコブ遺跡調査報告書 昭和 29 年 7 月。

(註 3) 苫小牧市教育委員会 苫小牧市字高丘遺跡調査報告書 昭和 39 年 8 月。

(註 4) 苫小牧市教育委員会 第四次苫小牧市植苗タブコブ遺跡調査概要 昭和 40 年 10
月。

(註 5) 苫小牧市教育委員会 苫小牧市沼の端丸木舟発掘調査概要報告書 昭和 41 年 7 月。

(註 6) 苫小牧市教育委員会 苫小牧大島遺跡発掘調査報告書 昭和 42 年 10 月。

(註 7) 佐藤一夫 苫小牧市高丘遺跡発掘調査報告 昭和 43 年 12 月。

(註 8) 佐藤一夫 苫小牧市美沢植村遺跡調査報告 「郷土の研究」3号 昭和 46 年 12
月。

(註 9) 佐藤一夫 苫小牧静川柳館遺跡発掘調査概報 昭和 45 年 8 月。

(註 10) 佐藤一夫 糸井第二遺跡 「苫小牧市史編さん資料」№3 昭和 46 年 8 月。

(註11) 田中政義 苫小牧附近の遺跡「先史文化」2号 昭和34年10月。小田憲作 苫小牧地方に分布する遺跡「ちやし」8号 昭和38年1月。天野憲彰 タブコブ遺跡を回想して「チャシ」9号 昭和39年3月。小野慶郎 苫小牧郷土史一原始・古代史を中心として「郷土の研究」1号 昭和39年7月。多田犬一 苫小牧市先史文化の概要「郷土の研究」1号 昭和39年7月。伊藤広行 タブコブ遺跡における発掘「チャシ」10号 昭和39年11月。小田憲作 日高苫小牧附近の遺跡の現状と問題点「チャシ」10号 昭和39年11月。

② 鵜川町・門別町・厚真町およびその周辺

鵜川町及び門別町は苫小牧市の東部に隣接し、厚真町は苫小牧市の東北部に隣接した地域を占めているが、地理的環境は前述した苫小牧市と全く同様な状態を示している。すなわち本地帯には厚真川、鵜川が流れており、その河口及び流域には平野が開け、背後には小丘陵が発達している。従って漁撈及び狩猟には最適の条件を備えている。おそらく本地帯はかつては苫小牧市と同様に、多くの人々が住居を構えていたことを推察される。

本地域に存在する遺跡についての調査は、前述した苫小牧市に比べれば、充分行なわれていない。しかしながら現在までに判明している遺跡は、数がすくないにもかかわらず、いずれも大規模で、かつ重要な遺跡ばかりである。

鵜川町に存在する遺跡については、藤本英夫氏、扇谷昌康氏、稲葉勝男氏らによって、昭和38年以来探索が行なわれ、それぞれの小報告が行なわれている(註12)。同36年扇谷氏は本町の汐見及び花岡において、大規模な墳墓遺跡を発見したが、翌37年に大場と扇谷氏は協力して本遺跡の調査を行なった。その結果本遺跡は、周溝を環した円形の盛土墳墓で、一つの墳墓内に、大きさ60cm—1mの6墓の墓穴を有する様式の墳墓遺跡で、北海道ではいまだ発見されていない様式の集団墳墓であることが確認された。年代は統縄文文化期に位置している(註13)。なお本遺跡は現在北海道文化財・史跡に指定され保護されている。

また花岡遺跡は、竪穴様の墓穴を有する墳墓群で、長径1m前後の円形または楕円形の墳墓が数十墓発見された(註13)。

門別町に存在する遺跡については、扇谷氏の調査があるが、ここでも鵜川町と同様に墳墓遺跡が多い。現在までに判明しているものでは、その年代は縄文文化晩期—統縄文文化期にかけてのものが多(註14)。

厚真町に存在する遺跡及び遺物についての調査並びに研究は、比較的近年に始められた。文献になっているものでは、昭和30年石井次郎氏の周文の竪穴様遺構の報告がある(註15)、ついで同31年亀井喜久太郎氏が本地で発見した土偶についての報告がある(註16)。その後同氏は

31年に、厚真町内に存在する遺跡の概要を誌した、「厚真村古代史」（註17）を刊行している。それによると、厚真町内の南部地区には、浜厚真、周文、上厚真、上周文、軽舞、当麻内、西周文の遺跡があり、中部地区には、振老、近悦府、仁達幌、上振内、振内、東老軽舞遺跡がある。また北部地区には、楡山、幌内、顔美宇遺跡があって、合計16ヶ所の遺跡が確められている。発見された遺物によれば、本町内には縄文文化中期以降、同後期、同晩期、続縄文文化期、擦文文化期の各年代のものが出土している。

以上にあげたように、鶴川町、門別町、厚真町内の遺跡については、必ずしも十分な調査が行われていないが、今日までに発見されているものでは、いずれも重要な遺跡が多い。今後更に探索を行なうことによって現在発見されている遺跡と同様な、重要遺跡が発見される可能性が多い。なお鶴川町、門別町、厚真町の周辺に位置する、由仁町、追分町、早来町にも、遺跡が存在していることは確かであるが、まだ専門家の調査が行なわれていないので、その文化内容は明らかでない。

（註12） 藤本英夫 鶴川町二宮出土のホタテ貝文土器 「アイヌ・モシリ」5-6号 昭和36年8月。稲葉勝男 鶴川流域の調査経過 「ちやし」6号 昭和36年8月。稲葉勝男 鶴川流域の遺跡遺物について 「ちやし」7号 昭和36年11月。

（註13） 大場利夫・扇谷昌康 勇払群鶴川遺跡 「北方文化研究報告」19輯 昭和39年6月。扇谷昌康 北海道鶴川町の盛土墳墓 「日本考古学協会研究要旨」 昭和38年10月。扇谷昌康 鶴川町夕見墳墓遺跡について 「北海道考古学」2輯 昭和39年3月。

（註14） 稲葉勝男 富川町周辺の遺跡 「先史文化」1号 昭和34年8月。扇谷昌康 門別町における先史遺跡の概要 「ひだか」9号 昭和36年2月。扇谷昌康 門別町トニカ遺跡調査概報 「日本考古学年報」3-4号 昭和37年4月。扇谷昌康 門別町トニカ墳墓遺跡について 「北海道の文化」 昭和39年3月。門別教育委員会・門別町郷土史研究会 門別町坂口遺跡・中沢遺跡調査概報 昭和35年10月。

（註15） 石井次郎 厚真村字周文の竪穴様の食料貯蔵跡について 「先史時代」2号 昭和30年11月。

（註16） 亀井喜久太郎 厚真出土の土偶 「先史時代」3号 昭和31年4月。

（註17） 厚真村教育委員会・厚真村郷土研究会 厚真村古代史一村内に存在する先住民族の遺跡一 昭和31年6月。

<室蘭地域における遺跡分布の現況>

① 白老町及びその周辺

白老町は苫小牧市の西部に所在する。ここは比較的平調な海岸線上に位置する。本地帯の海岸線上には、社台川、白老川、敷生川、登別川、幌別川の小河川が流れているが、苫小牧地帯に見られた勇払川、厚真川のような大河ではないし、また海岸線には大きな湾も見られない。それにもかかわらず海岸段丘上には、先住民族の遺跡が点在して認められる。本地帯は特に良好な地帯とは考えられないが、漁狩猟生活者には、格別の不便もなかったものと考えられる。

白老町に存在する遺跡についての報告は、昭和35年稲葉勝男氏の虎杖浜遺跡の紹介がある(註18)。同36年に扇谷昌康氏が、ボンアヨロにおいて、縄文文化早期の年代の遺跡を発見したが、同年大場と竹田輝雄氏が扇谷氏に協力して本遺跡の調査を行った。その結果ここは数少ない縄文文化初頭の堅穴住居址であることが判明し、堅穴内部から発見された土器は虎杖浜式と命名されたが、これと伴出した資料は一括遺物として価値づけられた。なお堅穴床から採集された木炭の、放射性炭素による年代測定の結果は、5190±70 B.C.とでて、縄文文化早期の年代を考える基準となっている(註19)。なお白老町から出土した遺物については、藤本英夫氏らの報文も見られる(註20)。

白老町の主として海岸段丘上に存在する遺跡について述べたが、本町の内陸部には、洞穴遺跡が存在していることが報告されている。目下判断している遺跡では、千代麩、扇谷昌康氏らによって発見された。登別と洞爺の洞穴遺跡がある(註21)。なお隣町の幌別町に存在する遺跡については、まだ充分な調査が行なわれていない。

(註18) 稲葉勝男 白老郡虎杖浜 「ちやしこつ」4号 昭和35年7月。稲葉勝男 虎杖浜遺跡の紹介 「ちやし」5号 昭和36年5月。

(註19) 大場利夫・扇谷昌康・竹田輝雄 白老郡虎杖浜遺跡の発掘について 「北方文化研究報告」17輯 昭和37年3月。稲葉・高橋・宇井 白老町虎杖浜の調査に参加して 「ちやし」7号 昭和36年11月。

(註20) 藤本英夫 白老町石山の砂丘遺跡の遺物について 「日高文化研究」3号 昭和37年3月。

(註21) 千代麩 北海道登別の洞穴調査予報 「洞穴遺跡調査報告」8号 昭和38年9月。

(註22) 扇谷昌康 北海道登別、洞爺の洞穴調査予報 「洞穴遺跡調査報告」12号 昭和39年5月。

② 室蘭市

室蘭市は太平洋に突出した^{エトモ}絵鞆半島を包含し、内浦湾の入口と内浦湾に面して形成された、小湾である室蘭湾を占めて位置している。小湾は現在室蘭湾になっているが、湾内に沿って多くの遺跡が存在している。しかし市の発展に伴い十分な調査を行なわないうちに、整地されて消滅した遺跡が多い。かつては湾内の北岸沿いでは、本輪西、ボンナイ、中島町、幌萌などの遺跡があった。また南岸沿いでは、エンルム（絵鞆）、ハシナウシ、祝津、小橋内、輪西などの遺跡が存在し、絵鞆半島の太平洋側には、増市、舟見町、イタンキ、鷺別などの遺跡が存在していた。それらうち、本輪西、ボンナイ、絵鞆、鷺別遺跡は、規模の大きい遺跡であったが、本輪西遺跡はすでに大正年間に消滅し、ボンナイ遺跡及び鷺別遺跡は、昭和 35 年以来徐々に整地されて来ている。また絵鞆遺跡は近く市の開発事業として整地される予定になっている。

室蘭市内に存在している遺物及び遺跡については、北海道内では最も早く、学会で紹介されている。すなわちすでに大正 7 年に、柴田常恵氏（註 22）、そして同 14 年には甲野勇氏（註 23）が、それぞれ輪西遺跡出土の土偶について報告を行っている。本資料は現在国の重要文化財に指定され、国立博物館に所蔵されている。大正 15 年には長谷部言人氏が、本輪西遺跡出土の骨角製鋳について報告を行なっている（註 24）。また昭和 4 年には大山柏氏が、本市で発見した土器について報告し（註 25）、同 7 年には八幡一郎氏が、本市で発見した石器について報告を行なっている（註 26）。

年代を経て、昭和 25 年に入り江坂輝彌氏は、本市から発見した、縄文文化早期の土器について報告を行なっている（註 27）。その後大場は岡本幹二氏と協力して、舟見町及びボンナイ遺跡の調査を行ない、その結果を、それまでに判明していた、室蘭市に存在する遺跡の概要と併せて、昭和 37 年「室蘭遺跡」を刊行した（註 29）。後本書の要約は、室蘭市が同 38 年に刊行した、「室蘭市史」に転載されているが、本書は今日まで刊行された、室蘭市に存在している遺跡についての代表的な文献である（註 30）。

昭和 38 年より室蘭市教育委員会、市立図書館、室蘭地方史研究会の共催で、市内に存在する遺跡のうち、近い将来破壊が予想される地点を、重点的に調査することが計画された。調査は同市の溝口稔氏、教育委員会の内山邦夫氏が中心になり大場も加って行なわれた。すなわち昭和 38 年と同 39 年にはイタンキ洞窟の調査が行なわれ、縄文文化晩期の遺跡であることが明らかにされた（註 31）。昭和 40 年と同 42 年には、イタンキ・ベンボック遺跡の調査が行なわれ、縄文文化晩期一統縄文文化期の壑穴住居址及び遺物包含地であることが確められた（註 32）。また昭和 44 年及び同 45 年には絵鞆遺跡の調査が行なわれたが、ここは縄文文化中期以降縄文文化期までの住

居遺構と墳墓遺跡であり、またチャシ(砦)が存在していることが判明したが、殊にチャシについては、その構造が北海道で始めて明らかにされた(註33)。なお上記の教育委員会主催の調査とは別に、大谷高等学校主催によって、鶯別遺跡の調査も行なわれている。昭和38年以後のこれらの調査については、概要報告書がでているが(註34)、本報告書は未刊である。

以上に述べた調査例によっても理解されるように、室蘭市にはかなり多くの遺跡が分布しており、しかもその中の幾つかは大遺跡であることから考えると、おそらく室蘭市の全域が、遺跡であると言っても過言でない。室蘭市教育委員会の永年に亘る、遺跡保護の努力にもかかわらず、遺跡の保護は、市街地の発展に追いつかない状態にあることは、誠に残念なことである。

(註22) 柴田常恵 室蘭より石器時代の土偶を発見す 「人類学雑誌」33巻7号 大正7年7月。

(註23) 甲野勇 北海道室蘭郡輪西村発見の石器時代土偶 「人類学雑誌」40巻1号 大正14年1月。

(註24) 長谷部言人 本輪西貝塚の鹿角製鉾頭 「人類学雑誌」41巻10号 大正15年10月。

(註25) 大山柏 室蘭出土の縄文式土器 史前学雑誌 1巻1号 昭和4年3月。

(註26) 八幡一郎 北海道室蘭の石鏡 「人類学雑誌」47巻2号 昭和7年2月。

(註27) 江坂輝彌 北海道室蘭出土の住吉町式土器 「貝塚」25号 昭和25年7月。

(註28) 室蘭市立図書館・室蘭地方史研究会 北海道室蘭市ボンナイ遺跡調査報告書 昭和36年8月。室蘭地方史研究会・室蘭地区高校文化連盟郷土研究部 北海道室蘭市ボンナイ遺跡調査概要(第二次) 昭和37年2月。

(註29) 大場利夫・岡本幹二・児玉謙次 室蘭遺跡 昭和37年7月。

(註30) 室蘭市 室蘭古代史 「室蘭市史」 昭和38年10月。

(註31) 高文連室蘭地区郷土研究部 北海道室蘭市イタンキ洞窟遺跡調査概要 昭和38年11月。溝口稔 イタンキ洞窟遺跡について 昭和39年3月。市立室蘭図書館 室蘭市イタンキ洞窟遺跡調査概要 昭和39年8月。

(註32) 市立室蘭図書館 室蘭市イタンキ・ベシボック遺跡調査概要 昭和40年8月。室蘭地方史研究会・室蘭市教育委員会・室蘭地区高文連 イタンキ・ベシボック遺跡第二次調査概要 昭和42年9月。

(註33) 室蘭市教育委員会 室蘭市絵柄遺跡発掘調査概要 昭和44年。室蘭市教育委員会・北海道高校室蘭地区郷土研究部会 室蘭市絵柄ボンチャシ発掘調査概要報告書 昭和45年。

(註 34) 室蘭大谷高校 北海道鷺別郡幌別町鷺別遺跡調査概要(第一次調査) 昭和 35 年 11 月。室蘭大谷高校 鷺別遺跡調査概要(第二次調査) 昭和 36 年 8 月。

〈苫小牧・室蘭地域における遺跡の保護〉

苫小牧及び室蘭地域は太平洋に面し、河川にも恵まれた所で、漁撈、狩猟に生活の基調をおいた先住民族にとっては、この上もなく恵まれた地理的環境にあったといえる。従って本地域には、北海道で知られている遺跡のうちでも、比較的大規模な遺跡が存在しているといっても過言でない。

今日までの調査によれば、苫小牧、室蘭の両地区とも、縄文文化早期から同前期、同中期、同後期、同晩期、続縄文文化期、擦文文化期、アイヌ文化期と、先史時代のすべての年代にまたがる、堅穴住居址を始め、洞穴住居址及び墳墓遺跡が、群在していることが認められている。そしてそれらの遺跡並びに遺物は、北海道中央部地区における代表的な型式を示すものである。

本地域に存在する遺跡については、必ずしも十分な調査が行なわれたのではないが、現在判明している範囲で、特色ある遺跡をあげれば、まず虎杖浜遺跡をあげることができる。ここは前述したように、北海道での縄文文化の発生に関連して、極めて重要な遺跡である。また苫小牧より鶴川に至る丘陵地帯で発見されている数十ヶ所の遺跡は、互に相関連した遺跡で、縄文文化の終末から続縄文文化にかけての、先住民族の聚落とその生活様式及び葬制などを知りうる重要な遺跡である。

また室蘭のボンナイ遺跡は、縄文文化前期から中期にかけて、いわゆる円筒文化の大遺跡である。しかし本地帯は充分調査を行なわないうちに、宅地化し、大部分が家屋の下になったことは惜みても余りあることである。本市絵鞆地帯は、縄文文化中期以降、同後期、同晩期、続縄文文化期の堅穴住居址と墳墓が、広く分布しているのみならず、北海道ではまだ明らかにされていない。チャシ(砦)も存在している。また本市鷺別遺跡には、縄文文化前期から中期にかけて、住居址と大貝塚が存在している。

苫小牧及び室蘭両地域に存在している遺跡については、各市町村の教育委員会を始めとして、関係者の人々の努力にもかかわらず、急速に破壊の方向に進んでいることは、誠に残念なことである。

殊に近々苫小牧東部開発のために、本地点の遺跡の破壊が予想されているが、苫小牧と鶴川を結ぶ地域は、前述した遺跡群が存在している。最近の調査によれば、静川台地上に 7ヶ所、柏原台地地上にはそれ以上の遺跡が存在していることが、佐藤一夫氏によって確認されている。従ってここは 600 平方 km の広範囲に亘って遺跡が存在しているものと考えられる。

現在日本の各地殊に北海道においては、国家の事業として、土地開発が進行しているが、北海道

の土中には多くの文化財が埋没している。これらは一度破壊されることによって、永遠に消滅してしまふ性質のものである。これに対処するには、今や姑息な手段では到底処理しえないので、文化財の管理と研究を専門に行う附設の調査機関を組織し、遺跡地帯の破壊には、まず保護手段を考え、やむをえない場合にのみ発掘調査を行なった上で、事業にとりかかるといった手段をとることが必要である。このことについては、もはや考慮して見るといった段階ではなく、速かに実行しなければならぬ時にきているように考えられる。

(第二部 : 函館地方)

(1) 函館山

1 函館市の西側を背景に標高(333.8m)の御殿山を主峯とする一帯の丘陵を函館山と呼び、北は弁天台地から南の立待岬に至るまで、周囲わずか9Km、面積330Km²の小さな山である。

地質年代の第4紀に大雪山系の山々や、狩場群山などと前後してできた山といわれ、幾多の噴火や隆起、沈降をくり返し、その間、本州や大陸との接続、あるいは日本海、津軽海峡の陥没による他地域との遮断などが起こり現在に至ったといわれる。

地質は安山岩が基盤をなし、溶岩、集塊岩その他の堆積物等がその上部を被っている。

こうした古い歴史と変化に富んだ複雑な地形、そして本州との間に位置する地理的条件なども重なって、南北両系統の豊富な植物が自生し、シダ植物以上の高等植物だけでも600余種を数えているのである。その上明治30年以後要塞地帯として長く封鎖されていたため地域内の植物は原生のままに保護され、学術上の貴重な地域とされている。

2 現況と問題点

戦後、要塞が市民に解放され一躍観光地として脚光を浴びるや自然の破壊が始まったのである。自然の理を無視した乱暴な観光道路工事や観光施設の設置により、この地域の植生は著しく荒廃し絶滅した種も数多い。

しかも現在、年間13万台を越える登山自動車をさばくため、御殿山、千畳敷、立待岬を通る函館山周遊道路が計画され、一部工事が始められている。この工事により既に山頂のツツジ原や亜高山性植物群は破滅してしまった。

しかし、この地域一帯は多くの貴重な植物が存在する函館山に残された最後の自然であり、特に立待岬の上方地蔵山の南斜面にはカツワ、ブナ、ミズナラの原生林を始め80余種の樹木が生い茂り、南方系のわたり鳥の北海道に於ける数少ない営巣地となっている。

また市街地側の東斜面には市街地や住吉浜への土砂流失を防ぐため植林されたといわれる杉の木立が山すそに広がっている。この樹林下にはエンレイソウはじめ多くの下草がところせましと広がり、シダ植物の種類は特に多い。

3 要 望

以上のことから函館山はただ単に市街地展望のための観光地として活用すべきではなく、その中に存在する多くの動・植物を含めた一大自然公園として市民に供すべきものとする。そのため函館山を大きく二つの地域に分け、すでに荒廃してしまった御殿山を中心とする北側は展望台、駐車場、ロープウェイ等の施設が出来ているところから今後必要最少限の周遊道路を敷設することもやむを得ないであろう。しかしその道路工事その他にあたっては土砂の流失はもちろん、法面の補修、

肩の部分の止めなど完全なかたちで行なわなければならない。

一方南の千畳敷側については、自然公園として活用し、車の乗り入れの禁止、自然遊歩道の設置、一部道路工事のため荒廃した裸地の複元など速やかにするとともに、この地域の地形、植生には人工を加えないこととする。

資料(1) 函館山千畳敷北東斜面の植生概観

1 森林階層は極めて複雑多岐にわたり、急斜面の狭い地域でありながら、種類は豊富である。

① 林冠を構成する主要要素(約44種)

イチイ、ドロノキ、カラフトヤナギ、オニグルミ、ミヤマハンノキ、ヤマハンノキ、ヒメヤシヤブシ、エゾノダケカンバ、ダケカンバ、シラカンバ、サワシバ、クリ、ブナ、カシワ、ミズナラ、ハルニレ、コブニレ、オヒヨウニレ、ヤマグワ、キタコブシ、ハウノキ、ウワミズザクラ、エゾノウワミズザクラ、ミヤマザクラ、エゾヤマザクラ、ナナカマド、アズキナシ、カマツカ、イヌエンジュ、キハダ、ニガキ、ヤマウルシ、ヒロハツリバナ、オオバヤムミ、ハウチワカエデ、イタヤカエデ、ヤマモミジ、トチノキ、シナノキ、モイワボダイジュ、ハリギリ、アオタモ、ミズキ、ハクウンボク、その他

② 低木層の主な構成要素(約42種)

ハイイヌガヤ、バツコヤナギ、イヌコリヤナギ、キツネヤナギ、エゾハシバミ、ヒロハヘビノボラス、オオバクロモジ、ノリウツギ、エゾアジサイ、エゾスグリ、ノイバラ、クマイチゴ、クロイチゴ、ウラジロイチゴ、ナワシロイチゴ、ホザキナナカマド、エゾノコリンゴ、エゾヤマハギ、エゾユズリハ、コマユミ、リシリタチウルシ、ミツバウツギ、クロウメモドキ、キブシ、ナニワズ、アキグミ、ナツグミ、ウリノキ、オニウコギ、トゲナシオニウコギ、タラノキ、ハナイカダ、エゾイボタ、ムラサキシキブ、クロミノウグイスカグラ、カンボク、ウグイスカグラ、キンギンボク、エゾニワトコ、アラゲガマズミ、ムシカリ、クサギ、その他

(2) 国道5号線アカマツ並木

1 位 置

亀田郡七飯町 国道5号線の両側

2 状 況

このアカマツ並木は国道5号線の大沼トンネルから亀田市桔梗町までの、両側に延べ1.2kmにわ

たって続いている。五稜郭築城当時植えられたもので、樹齢100年を越える老大木も含めて現在約1,700本あり、東海道のマツ並み木が道路建設のため姿を消した今日では、日本に唯一残る街道のマツ並み木として旅行客からも親しまれている。尚、このアカマツ並み木は北海道の名木・美林に選定されている。

3 保護上の問題点

近年この並み木もその存続に幾多の問題をかかえている。例えば、

- 1 自動車の排気ガスによる被害
- 2 歩道及び側溝建設による被害
- 3 広告物による美観等の問題
- 4 5号線の拡幅計画による伐採等の心配、などである。

1の自動車の排気ガスの被害とは、このガスによって枝が枯れていることである。並み木の枝は道路をアーチ状におおい、そのみごとな枝ぶりは排気ガスをまともに受けるからである。

2の歩道及び側溝による被害とは、これによって松の根が両側から切断され、老木に加え、栄養の吸収不足と風によって倒される心配がある。

3の広告物による美観等の問題とは、広告物を建てるために根をいためたり、美林としての美観を損ねることである。

4の5号線の拡幅計画による伐採等の心配とは、道開発局は国道5号線の拡幅計画を決定した際、そのコースのとり方として次の3方法をあげている。①現在の道路は2車線のまゝ残り、並み木の外側に2車線をつくる。②松並み木を切り倒し、4車線にひろげる。③4車線道路を現在のルートとは別に新設するなどである。①②の案は自然保護に逆行するもので、当協会としては強く反対するものである。

この①②の案では東海道の二の舞をふむことになり悔を残すことになる。是非とも③案を早急に採用し、この並木の保護に手をつくすべきである。

(3) 湯ノ浜のクロマツ林

函館の東部、温泉郷で有名な湯ノ川温泉の一面、国道278号線を隔て大森浜に面している。国道に沿っておよそ2ヘクタールの面積に約4千本のクロマツが植えられているが、樹齢も百年に近く、また長い間強い海風にさらされた形跡も樹木のいたるところに見られる。このクロマツは、海から吹き込む強い風砂を防ぐため、苗木を三保の松原から取寄せたという由緒あるもので、現在温泉郷の一面に美しい林をつくり訪れる人達の目を楽しませてくれる。しかし最近、この林もいたみ

がひどく放置しておく、近い将来には、美観を損うばかりか絶滅にひんするおそれもある。現に 8方を道路に囲まれている一画では、90本余りのうち、すでに10数本が枯死したり切り倒されたりしているが、これは管理状況は、所有が函館病院になっているため、市が直接携わっていない。またここ数年来、湯ノ川温泉業者がレジャーランド建設計画を立て、松林の譲渡を市に申し入れている。これに対し病院側も、できれば処分したい意向を仄めかしている。林全体は、東、南、西側を道路で囲まれ、北側は住宅、アパート、福祉施設と隣接しているが、その境は相当前に張り巡らされたと思われるばら線のあとが残っている他は、きちんとしたさくもなく、どこからでも自由に入りができる状態となっている。そのため林内には、自然に道らしきものができ、下草もめぐりとられたようになっている。子ども達がボート遊びをしたり、枝に縄を掛けて遊んだりするために、林床もすっかり堅くなっていたり、広場状になっている所も見受けられる。また道路ぎわや住宅地に近い所では、紙くずや木片の他、木箱や石油かんなどの大きなごみが散在し、建築林の置き場となっているところもある。南側の国道沿いには、植樹され8メートル位に生長したクロマツの一群があるが、これも植えっぱなしの状態、混雑の中伸び放題になっている。国道278号線は、函館の中心街松風町を通り海岸沿いに走っているが湯の川までの間、緑の樹木の見られないこの地域で、道内ではめずらしいクロマツの林を、記念樹林としてまた市民のいこいの場として活用できるように、早急に整備保全の手を加えられなければならない。

(4) 見晴公園

函館市の東、湯の川を流れる松倉川の上流にあるこの公園は、もとは個人の庭園としてその美しさを誇っていたものであるが、近年市が譲り受け管理しているところである。当初より市の美しい公園として、その中にある種々の樹木や庭木など市民の目を楽しませてくれていたが、数年前よりこの公園の後方の丘をゴルフ場に、その出入口を園内に作ったためゴルフ場利用者を始め訪れる行楽客が車で園内深くまで入り込むようになった。

このため入口付近にあった数種類の樹木はその排気ガスとほこりのため衰弱し、キンヒバはそのほとんどが枯死してしまった。

園内には由緒あるウメの木を始めサクラ、ツツジ、コウヤマキ、イチイ、トドマツ、ヤマモミジ、ハウチワカエデ、シナ、ミズキなど美しく立ち並んでいるが、今後こうした車の乗り入れを許すかぎり、それらの樹勢は著しくおとろえるものと考えられる。

市では園内の一部をアスファルト化し、ほこりを防いでいるが、これは本未転倒もはなはだしく、早急に車の乗り入れを禁止することが当然で、その為公園入口附近の広大な土地を利用して駐車場

を作るべきである。

(5) 五稜郭公園

1 位 置

函館市の北東、亀田市との境界にあるこの公園は江戸時代幕府の命によって築城された五稜郭城跡を市が公園として管理しているところである。周囲約4Kmの星形の堀に囲まれた園内と附近一円をいう。

2 現況と問題点

園内の管理は当然のこと乍ら、車の出入りを禁止したり、遊び場を限定したりして比較的行き届いており、老木化したサクラに変わって苗木、幼木も補充されている。その他園内のアカマツ、サクラ、フジ、ツツジなどもそれぞれ美しい景観を呈している。

しかし公園を取り囲む堀については、近年、近くに住宅、飲食店などが急速に建ち、この堀に流れ込む亀田川の用水が汚染されてきた。このため、堀の中の生き物は著しく減少し、そのまま進めばますます汚染がひどくなり悪臭の立ち始めるのも時間の問題と考えられる。早急に附近一帯の大々的な上下水道の完備をするとともに、堀の水の浄化に努めることが必要である。

またこの公園附近には風致林として、アカマツの並木が諸々に見られたが、道路工事や宅地化のため伐採し、今では数える程しかなくなった。しかしこの残された樹木も自動車の排気ガスによる大気汚染や、マツクイムシ等による被害の為衰弱の一途をたどり枯死したものもある。

こうしたアカマツを環境緑地帯として活用すべく、その為にサクをめぐらしたり、樹林下を芝生にするなど早急に手をこたざることを希望する。

(6) 横津岳、及び袴腰岳地域

1 位 置

横津岳、袴腰岳の連山を中心とする山塊で主峰横津岳(標高1166.9m, N. 41°50', E. 140°45')をつつむ、N. 41°53' ~ 41°57' E. 140°44'30" ~ 140°51'30" の地域を対象とする。

なおこの地域は、函館市、亀田市、七飯町、南茅部町の四市町にまたがっている。

2 植生の概観

この地の植生の概略は資料1のとおりであるが、自然保護の立場から特に下記の点に留意したい。

1) 西部(七飯町)の山麓に、植林地と放牧地がわずかにみられるが、その他の地は、登山

歩道が数本存在するだけで、ほとんど人為的にみだされず自然植生の遷移過程を経てきたと考えられる。

2) 羊蹄山以南にあって高山性植物の分布が、種類数の最多の地域である。

3) 横津、袴腰の両頂部を結ぶ尾根上(標高 1,040m)に存在する湿原は、北海道最南端の高層湿原として貴重なものである。

3 当面している問題

この地域南西部(国道5号線大中山附近)から横津岳頂部にかけて、七飯町及び東海不動産株式会社の計画により

1) 自動車2車線道路の開発(昭和46年12月現在、標高800mまで開通)

2) 中腹放牧地をゴルフ場として開発(完成)

3) 標高850m地から頂部にむけて(標高1,080m)リフト設置(完成)

等の観光開発がなされ、47年には、さらに諸施設(休憩所、売店等)が増加されることになっている。

また、七飯町としての計画には、今後、1)の路線を北にのばし、東大沼に至る周遊観光路とする意も表示されている。

したがって、現在及び今後の開発計画について、学術上及び景観上、大きな問題をもつ地域と考える。

<横津岳附近の地質>

横津岳、袴腰岳は地質構造的には那須火山脈に属すると云われている。これらの山の基盤をなす岩石は、黒松内層及び八雲層と呼ばれている新第三紀中新世に堆積した主に火山碎屑岩である。したがって、その時代(おおよそ2000万年前)にこの地域にすでに火山活動のきざしがあらわれ、その次の時代の鮮新世になってはげしい火山の爆発がはじまり、多量の熔岩を流出して、これらの山が出来たと考えられている。しかし、その活動は恐らく第三紀末にはすでに終り、第四紀には浸食作用を受ける立場にあったので、現在ではこれらの山に明らかに爆裂火口であるとみられるものは残存していないし、また地形的にも火山特有の形をとどめていない。その熔岩は横津岳熔岩と呼ばれ、横津岳を中心として放射状に張り出し、袴腰岳や檜山、烏帽子岳、七飯岳などが独立峰として分布している。この横津岳熔岩は、ところによって岩質がいくらちがっているが、それはその噴出時期のちがいによるものかもしれない。

この横津岳熔岩をとりまく地域のあちこちに温泉が湧出している。これらの温泉は上述した火成

活動に関連していることは勿論であるが、その泉源は八雲層、黒松内層などの中に存在するようである。

(北海道教育大学函館分校 地学教室
理学博士 坂上澄夫先生より)

<横津袴腰連峰の植物>

函館市立大川中学校教諭

宗 像 和 彦

横津岳(1166米)、袴腰岳(1108米)は渡島山脈主脈から、渡瀬氏の提示する函館地溝線をはさんで分岐した支脈、いわゆる亀田山脈の主峰山塊であり、第三紀に属する基盤をもつといわれ、この地を貫き噴出した火山岩も現地形形成に関与しているとみられる。

横津岳と袴腰岳を結ぶ尾根を分水嶺として四方に数多くの山装を広げ、侵蝕の進んだ谷を含んで広域のすそをもつ山地であり、渡島地域最高地としてその頂部台地から、南及び西方向に大野平野、函館湾、さらには松前・福島の山岳地を、北及び東方向には内浦湾とその沿岸地、眼前に秀峰駒ヶ岳(1140米)、遠くの羊蹄山(1898米)を含む山の峰を望むことができる。

この山岳地は、道南西部の地として、比較的多くの樹種が林を構成して山麓部をつつんでおり、林床には本州要素を多く含んだ植生がみられているが、山腹約700米以上になると樹種を減じ1100米以上の地には林の構成はみられず、高山性低木帯と草原がササの混入をうけながら小規模に発達している。また頂部台地、尾根部の集水地には湿性植生がみられている。以上の状況で出現してくるものを簡略に列記すると以下のようになる。

1 樹 木

○ 低部山麓

植林によりスギ、カラマツ、エゾマツ、アオトドマツの林地もみられるが、自然林では落葉広葉樹を主とする第二次的な雑木林である。その主なるものは、

アオダモ、ミズキ、センノキ、コシアブラ、シナノキ、トチノキ、イタヤカエデ、ヤマモミジ、ハウチワカエデ、アズキナシ、エゾヤマザクラ、ナナカマド、キタコブシ、ホウノキ、オヒヨウ、コナラ、ミズナラ、クリノキ、ヤマナラシ、ブナ、ヤマハンノキ、サイハダカンバ、エゾダケカンバ、シラカンバ、アカシデ、サワシバ、サワグルミ

であり、針葉木本としてはイチイ、ハイイヌガヤ、が数少なく混生している。

○ 高部山麓(700~1100米)

限られた少ない樹種の混生林、または純林となり、林床ではササの優占が顕著である。主

なるものは、

イタヤカエデ、ミネカエデ、オガラバナ、ナナカマド、ミヤマナナカマド、ヤマハンノキ、ミヤマハンノキ、エゾダケカンバ、シラカンバ

○ 高山性低木帯

道南地域の高木限界は、羊蹄山（1898米）、狩場山（1520米）の植生からみて、標高1800米あたりとみられ、横津岳地域の頂部は限界内の位置にあるが、地理的、地形的、気候的諸条件により山塊東部は1100米、西部は1000米、あたりから高木林の構成はみられず植生高木、低木の叢地となり、頂部台地草原とつながっている。主なるものは、

ミヤマガマズミ、オオバスノキ、ミヤマホツツジ、コメツツジ、ハリブキ、ミネカエデ、ミネザクラ、タカネナナカマド、ミネヤナギ、ハイマツ

この地のハイマツは純群落の形成がなく、他種木本、ササ、と混生し、また直立状の生育がみられている。

2 高山性植物

高山性または亜寒帯性としてあつかわれる小低木、草本類は山腹500～600米あたりから林床、道端にみられ、頂部草原にかけてそれぞれの環境をえらんで生育している。

○ 林床（～1000米）

ウサギギク、エゾシオガマ、オヤマリンドウ、ツマトリソウ、イワカガミ、イワツツジ、クロウスゴ、エゾイソツツジ、ミヤマホツツジ、ホツツジ、ゴゼンタチバナ、ハクサンボウフウ、ミヤマタニタデ、オオバキスミレ、フギレキスミレ、ミヤマスミレ、ムラサキツリバナ、ウメバチソウ、ズダヤクシユ、ミヤマガラシ、ミヤマタネツケバナ、サンカヨウ、ミヤマオダマキ、ミツバオウレン、メイゲツソウ、クルマユリ、オオシユロソウ、ハクサンチドリ、ノビネチドリ、コタヌキラン、ミヤマクロスゲ、ミヤマヌカボ、コメススキ、ヒカゲノカズラ、アスイカズラ

の生育がみられる。

○ 低木叢及び草原地（1000米以上）

この地で生育している植物は、この地域に限られた種類のみではなく、樹林地から出現している種類も多く含まれ、高山葉植生の特性を示す地ではない。主なものは、

ミヤマアズマギク、トウゲブキ、タカネコウゾリナ、オヤマリンドウ、ツマトリソウ、コツマトリソウ、コケモモ、シラタマ、コメツツジ、キバナシヤクナゲ、チシマツガザクラ、ハクサンボウフウ、イワオトギリ、チシマフウロ、ミヤマキンバイ、マルバシモワケ、ウ

メバチソウ、ミヤマオダマキ、イワツメクサ、ハクサンチドリ、ネバリノギラン、エゾカンゾウ、ミヤマクロスゲ、ミヤマヌカボ、タカネコウボウ、ミヤマノガリヤス、コメスキ、タカネヒカゲノカズラ、アスイカズラ

がみられる。また部分的に存在する裸地、礫地では限られた地に数少なく、

タカネニガナ、イワギキョウ、イワウメ、タカネスマレ、ミヤマハタザオ、シコタンソウ、イワベンケイソウ、オヤマソバ

の生育をみる。

○ 湿地草原

横津岳山頂台地南西部と、横津袴腰間にある俗称烏帽子岳（1074米）のふもとに、集水の利を得て湿地草原が小規模に発達しており、ここでは

ツルゴケモモ、コモウセンゴケ、ミヤマキンボウゲ、シナノキンバイ、コバイケイソウ、ミヤマイ、シヨウジョウスゲ、ワタスゲ、サギスゲ

があり、湿地草原の特徴をよく示している植生がみられる。

(7) 南北海道に於ける動物

道南の鳥獣は地方型が主であり津軽海峡に依り本州と隔離され謂るブラキストンラインとなり地方型の南限となっている（ヒグマ・シマリス・タイリクモモンガ・シマフクロウ等）。又此のラインに依り同種でも亜種となりグループを形成して居る（キタキツネ・エゾタヌキ・エゾコゲラ・エゾアカゲラ・ミヤマカケス・シロハラゴジュウカラ・エゾメジロ・キタキバシリ等）。

鳥類は一部南方型の鳥（チゴモズ等）もみられ渡鳥のコースとしても重要な地位をしめて居る。海流の影響を受ける鳥類のウミガラスが繁殖し哺乳類のオットセイ・アザラシ・トド等は寒流にすむプランクトン・魚類等の海産動物を追って南下北上するコースとなっている。

天然記念物のクマゲラ・オオミズナギドリが繁殖しオオワシ・オジロワシ・シマフクロウが飛来する。其の他重要な動物が棲息している。

道南の動物環境は未だ恵まれた地域千軒岳・狩場山・羊蹄山・駒ヶ岳及周辺の沼等多く残されており、行政的に国設鳥獣保護区・鳥獣保護区・休猟区・公園等で保護されているが近年開発に依り急速に環境が破壊されつゝあり野生鳥獣は減少の傾向を示し特に渡鳥管内の水鳥は危機に直面している。

動物の生息環境の破壊されている地域

檜山支庁管内

上の国、江差・厚沢部方面は道内第一と云われるカモ類等、水鳥の飛来繁殖地であるが河川改修等に依り、生息地が失われつゝあり。

渡島支庁管内

久根別川水系 管内一のカモ水鳥の繁殖飛来地であるが改修工事に依り上流から川口迄完全に整理され直線的コンクリート護岸工事が行なわれ附近排水溝等も殆ど改修された。又湿地帯も埋め立てられつゝあり、旧河川も水が濁れ又埋立てられた。現在下流の旧河川を残すのみとなった。此の地域も10年以内に消滅すると思われる。

大野川水系 下流一部工事された。

七重浜より上磯間の砂原 シギチドリ類が飛来一部繁殖しているが開発が進みつつあり。

函館深堀川水系 すでにヒューム管工事等に依り宅地化され上流のダムのみとなった。更に水田湿地帯を完全宅地化の計画が進められている。

横津岳等レジャー施設自動車道路等に依り少い、エゾモモンガ・エゾタヌキ・エゾライチョウが生息出来なくなると思われる。

函館山の鳥は減少しつゝあるが種類が多く120種余。附近海域を含むと168種余が確認されているが道路が出来てから数が少なくなりクロツグミ等繁殖数が減少した。又ウの休息地があり特に夜間集団で休む。235羽多い時にわ600羽観察されている。シマリスも2匹観察されている然るに、ウの休息地の上に道路をつける計画あり。

結 論

積極的保護対策が必要であり河川改修工事に当っては、植林に依って休息場所を作り旧河敷地は繁殖休息地として残すべきである。

宅地化する場合は、野鳥誘致林を造成し単なる観光レジャーの為の自動車道路は制限しなければ野生鳥獣は極度に減少し一部絶滅し動物相が変るであろう。

<苫小牧の野鳥目録>

科名 種名
カラス：ハシブトガラス、ハシボソガラス、ホシガラス、カケス

ムクドリ：ムクドリ、コムクドリ

キンバラ：スズメ、ニュウナイスズメ

アトリ：シメ、イカル、カワラヒワ、マヒワ、ベニヒワ、ベニマシコ、ウソ、イスカ、ナキイスカ、アトリ、ハギマシコ、シマアオジ、ミヤマホオジロ、アオジ、ホオジロ、ホオアカ、カシラダカ、クロジ、オオジュリン

ヒバリ：ヒバリ

セキレイ：ピンズイ、タヒバリ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、キセキレイ

メジロ：メジロ

キバシリ：キバシリ

ゴジュウカラ：ゴジュウカラ

シジュウカラ：シジュウカラ、ヤマガラ、コガラ、ハシブトガラ、ヒガラ、エナガ

モズ：オオモズ、モズ、アカモズ

レンジャク：キレンジャク、ヒレンジャク

ヒヨドリ：ヒヨドリ

ヒタキ：コサメヒタキ、エゾヒタキ、サメヒタキ、ムギマキ、キヒタキ、オオルリ

ウグイス：キクイタダキ、エゾムシクイ、メボソムシクイ、センダイムシクイ、ウグイス、ヤブサメ、エゾセンニュウ、マキノセンニュウ、オオヨシキリ、コヨシキリ

ツグミ：トラツグミ、マミジロ、クロツグミ、シロハラ、マミチャジナイ、アカハラ、ツグミ、ノビタキ、ルリビタキ、ノゴマ、コマドリ、コルリ

イワヒバリ：カヤクグリ

ミソサザイ：ミソサザイ

カワガラス：カワガラス

ツバメ：ツバメ、イワツバメ、ショウドウツバメ

アマツバメ：アマツバメ、ハリオアマツバメ

ヨタカ：ヨタカ

カワセミ：ヤマセミ、カワセミ、アカショウビン

キツツキ：ヤマゲラ、アカゲラ、オオアカゲラ、コアカゲラ、コゲラ、クマゲラ、アリスイ

ホトトギス：カッコウ、ツツドリ、ホトトギス、ジュウイチ

アビ：ハシジロアビ、オオハム、アビ

ハト：キジバト、アオバト

シギ：アカエリヒレアシシギ、クサシギ、タカブシギ、キアシシギ、イソシギ、ツルシギ、アオアシシギ、キョウジョシギ、ソリハシシギ、オグロシギ、オオソリハシシギ、ダイシャクシギ、ホウロクシギ、チュウシャクシギ、オバンシギ、ハマシギ、トウネン、キリアイ、ミユビシギ、ヤマシギ、タシギ、オオジシギ、チュウジシギ

チドリ：ダイゼン、ムナグロ、メダイチドリ、シロチドリ、コチドリ、イカルチドリ

カモメ：アジサシ、ミツユビカモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、カモメ、ウミネコ、シロカモメ、ユリカモメ

トウゾクカモメ：オオトウゾクカモメ

ウミスズメ：ウミガラス、ケイマフリ、ウミスズメ、コウミスズメ、ウトウ

クイナ：クイナ、ヒメクイナ、シマクイナ、ヒクイナ、バン、オオバン

キジ：エゾライチョウ、ウズラ、コウライキジ

フクロウ：オオコノハズク、コノハズク、トラフズク、コミミズク、アオバズク、フクロウ

ハヤブサ：ハヤブサ、シロハヤブサ、チゴハヤブサ、コチウゲンボウ、チョウゲンボウ

ワシタカ：ノスリ、ケアシノスリ、クマタカ、チュウヒ、ハイイロチュウヒ、オオタカ、ハイタカ、ツミ、トビ、オジロワシ、オオワシ

ミサゴ：ミサゴ

サギ：アオサギ、ミゾゴイ、ヨシゴイ、オオヨシゴイ、サンカノゴイ

ガンガモ：オオハクチョウ、ハクチョウ、マガン、ヒシクイ、マガモ、カルガモ、オカヨシガモ、コガモ、トモエガモ、ヨシガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、オシドリ、ホシハジロ、アカハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、ホオジロガモ、コオリガモ、ビロードキンクロ、クロガモ、シノリガモ、ミコアイサ、ウミアイサ、カワアイサ

ウ：ウミウ、ヒメウ

カイツブリ：アカエリカイツブリ、ハジロカイツブリ、カイツブリ